

淨土經典における天について

坪 井 俊 映

阿彌陀佛經典の編纂傳承について明確なる結論を出すことは困難な事であるが、これは印度の吠陀時代より盛んであつた生天思想に大なる關連を有するのである。阿彌陀佛經典中代表經典とされてい

る無量壽經を見るに、これは古來より度々西來三藏によりて譯出され、現在漢譯と梵藏本と合して七種の異譯經典が存しているのである。これらの經典はその内容説明に於て、それぞれ特色を有し、素朴的なものより次第に發展して、現行流布本の無量壽經（康僧鎧譯）の如きものになつたと考えられる、これらの經典に説く淨土莊嚴の説相に就て、彌陀教徒がこれを傳承する間に天の觀念に關連して、常に増廣改變を加へたものと推察される。⁽¹⁾

印度思想に於てその最高權位者たる波羅門は死後天に生ずと云う信仰あり、かの耶魔 Yama 天國の如きは吠陀時代に於て、最高の天 Param Vyoman とされ、この天國に生れたものは完全無缺なる身體を得て貴賤貧富の別なく皆な安樂を受け、その天にまた音樂唱歌あり、父母妻子の團樂あり、百味飲食自然に涌出し諸神も耶魔を中心として菩提樹下に大宴會をなす安樂な所としている。⁽²⁾この耶魔天は佛教にて六欲天の中、下より三番目の天に攝せられてゐる。

佛典にても天は樂所善所とされ、大毘婆沙論百七十二には「諸趣の中に於て彼の趣は最勝最樂、最善最妙最高なり」と云い、正法念

處經二十二⁽⁴⁾には「諸樂集まるが故に名けて天となす」と明し、阿含には忉利天上生の説が各所に見られ、その上生の業としては比較的世界的な行業を以てしている。

この忉利天とは梵語 Trāyastriśat の方言の音譯で、譯して三十三と云う。欲界六天の中四王天の次上にある天界であつて、帝釋天（釋提桓因）の住所である。この帝釋天は梨俱吠陀に於て最大の勢力を有する因陀羅 Indra 神で、これを三十三天と云うについてその内容は不明であるが、吠陀にて天空地の三界にそれぞれ十一神ありとし、總數三十三神を擧ぐ處より、これを因陀羅 Indra 神の率いる一群の神として三十三としたものであらうと思われる。阿含に於て盛に説かれた忉利天上生の考えを受けて、これを淨土の説明の引例とし、規準としたものに阿閼佛國經がある。

阿閼佛國經によると忉利天を淨土説明の引證としている處が三ヶ處あり、その一は阿閼佛國の飲食の自然在前のこと、二は阿閼如來の法王たること、三は阿閼佛國と忉利天とが梯陞を以て結ばれていることである。この初めの二つは阿閼佛國の安樂は忉利天のそれに等しきことの例證として出し、第三は忉利天と阿閼佛國の連絡していることを明す。この忉利天を以て淨土説相の引例とするはこの他に道行般若經（支婁迦讖譯）、超日月光三昧經（西晉攝承遠譯）、七女

淨土經典に於ける天について（坪井）

經（吳支謙譯）法華三昧經（劉宋智嚴譯）幻土仁賢經（晉、竺法護譯）大般涅槃經（東晉、法顯譯）等あり、他に死後の天國とされるものに佛昇忉利天爲母說法經（晉竺法護譯）義足經（吳支謙譯）等あり。これらは忉利天を安樂所とする考えに乗じて淨土の樂妙を明したものである。

これに對して阿彌陀佛の淨土は欲界六天の最上に位する他化自在天を以てしている。支那譯最古の無量壽經典とされている吳支謙譯の大阿彌陀經を見るに、他化自在天を引例する所が七ヶ處あり、その中始めの四が他化自在天の如くならんといひ、後の三はそれ以上であること明している。即ち（一）本願の第三願に往生人の所居の舍宅被服飲食の自然なること、（二）第九願に淨土の菩薩阿羅漢の面目の端正淨潔にして同一色なること、（三）淨土の七寶の大地のこと、（四）淨土の百味飲食のこと、以上の四は「如第六天王所居處」、「如第六天上自然之物」と明し、後の三は（A）淨土の菩薩阿羅漢の面狀の偉大なること、（B）淨土の音樂の勝れたること、（C）阿彌陀佛國の講堂舍宅の勝れること、この三は「勝第六天百千億萬倍也」と云つて他化自在天よりも勝れたものと云う。これを他の六種の異譯經典の上に見るに本願の文に於ける引證は何れも見出されぬが、それ以外は大體大阿彌陀經に類同している。

又大阿彌陀經には忉利天を以て淨土の引證とする處あり。三輩往生の章に於て上輩のものは淨土の七寶の蓮華中に化生するに對し、これより劣れる中下輩の往生者は淨土の邊地七寶城に化生す。この邊地七寶城か忉利天の如しと云ひ、「城中より出ることあたはず、復た阿彌陀佛を見るを得ることあたはず」と云う。

かくの如く阿閼佛國經は 利天の快樂を以て佛土の安樂を説く引

例とするに對し、無量壽經は他化自在天の結構莊嚴を以て極樂淨土説明の引證とし、土の邊地七寶城は忉利天を借りて明しているのである。

淨土の莊嚴をこの第六他化自在天を以て説明する經典はこの他に海龍王經（晉竺法護譯）、商主天子所問經（隋闍那崛多譯）、大哀經（晉竺法護譯）、說無垢稱經（唐玄奘譯）等あり、何れも淨土の結構莊嚴、受樂果報の微妙安樂なること第六天の如しと結んでいるのである。

この他化自在天（Paranimita-vāsa-vartin）は他化天、他自轉天、他化樂天とも云はれ、六欲天中の最上の天である。この中四王天、忉利天、耶魔天、兜率天の四天はその神格が比較的明確であるが、この他化自在天と次下の化樂天とは經說に於てその性格が餘り明白でない。立世阿毘曇論第六によると

他の化作する所の宮殿園林一切の樂具の中に於て自在の計をなし、此れは我所なりと中に於て樂を受く。

と云ひ、又この天界には優鉢羅花、解脫花等の花あり、闍浮提に勝れたる長壽端正多樂の三德ありとし、人壽千六百歳を一日一夜としてこれを算じて萬六千歳に至るとす。

然るに大智度論第十によると、

魔王は常に來りて佛を嬈す、又これ一切欲界の中の主たり、夜魔天、兜率天、化樂天は皆な魔王に屬す、（中略）魔はこれ他化自在天なり。

と明し、六欲天中、上の四天主を魔王としている。即ちこの他化自在天は安樂な所であると共に魔王の住所とされていた様である。然しこの魔王とする考えは後で加わつたものではなからうか。

かくて阿闍佛國の淨土の有様は勿利天に譬え、阿彌陀佛の極樂は他化自在天に譬えて説く所に、これら經典編纂の意圖が印度一般民衆の天に對する考えに乗じて、その淨土の殊勝妙樂を示さんとしたものと考えることが出来る。而て中阿含卷二によるに

諸の弟子等法を具足奉行せざるものあらば彼命終し已りて或は四王天に生れ、或は三十三天に生れ、或は焰魔天に生れ、或は兜率天に生れ、或は化樂天に生れ、或は他化樂天に生る、若し善眼大師ために梵世法を説く時、諸弟子等もし法を具足し奉行するものあらば彼は四梵室を修し、欲を捨離し彼命終し已りて梵天に生ずることを得る。

と云い、法を具足するものと具足せざるものとは命終以後の生處に異なりあるを明し、更に同經第六には四王天、耶魔天、兜率天と次第して上界に居する天ほど勝れ、他化自在天の上界にある梵天を以て最も勝れた處としてゐる。かくて天界の中で上に擧るほど價值が高く、下へ降るほど低いとされているのであるが、この梵界までの説は正統波羅門の説で、波羅門は梵界に生ずることを目的としてゐると云われるが、この價值の低いとされている勿利天、又は他化自在天の安樂を以て佛の淨土の莊嚴の殊妙なることを譬える所に經典編纂の意趣が伺えるのである。殊に大阿彌陀經に明す阿彌陀佛の前身なる曇摩迦菩薩の二十四本願を明す中に於て、第三願と第九願に於て、構える淨土の結構莊嚴を「第六天王所居の處の如くならしめん」と云い、又淨土の菩薩阿羅漢の相貌は「第六天人の如くならしめん」と云う如き、第六天の莊嚴を以て殊勝妙相の規準として、これに類同せんことを願するより見るに、この大阿彌陀經編纂の時には六欲天を以て樂所とすると共にその最高位にある他化自在天は最

も勝れた所とされていた様である。従つて西方淨土の殊妙莊嚴を明すにこの第六天の妙勝を譬えに引例することが人々に淨土を理解せしむる上に於てより適切であつたであらうと考えられる。

而して前引の中阿含によると法を具足するものは梵界に生じ、具足せざるものは第六天以下に生ずると云う。波羅門は梵界に生ずることを目的とすと云うからして、今云う所の法を具足するものとは波羅門又は出家者であらう。されば具足せざるものはそれ以外の一般大衆と考えられる。六欲天上生の因として明す行が世間的善業であるに對し、梵界上生の因が出世間的な行を主として説くを見れば、第六天の樂所に生ぜんことを願う一般大衆の考えに乗じて淨土經典が編纂されたことが伺い知られるのである。

1 平等覺經、大阿彌陀經の末尾に經を持して妄に増減することなかれと云うは、この經の成立當時少なからざる經典の改變のあつたことを示すものと云うことが出来る。

2 印度哲學宗教史（高橋順次郎、木村泰賢共著）一五八頁。

3 大毘婆沙論一七二（正藏二七卷八六八頁）。

4 正法念處經二二（正藏一七卷一二五頁）。

5 世界聖典全集波羅門教部一五四頁。

6 立世阿毘曇論第六（正藏三二卷一九八頁）同論九（正藏二五卷一二三頁）。

7 大智度論一〇（正藏二五卷一三四頁）。

8 中阿含第二七日經（正藏一卷四二九頁）。

9 中阿含第六梵志陀然經（正藏一卷四五八頁）。

10 印度哲學研究三（一五八頁）宇井伯壽著。